

〔社〕日本施設園芸協会（兵藤宗郎会長）は9月18・19日、秋田県大潟村の農業技術交流館で、「施設園芸新技術研修会・秋田大会」を開催した。県内生産者をはじめ、国・県農政関係者、JA役員ら500名を超える参加者がつめかけ、稲作主体県でありながら施設園芸に寄せる関心が高いことをうかがわれた。

同研修会は、同協会が地域の実情に即した新技術の有効適切な導入を目的に昭和58年から全国で開催しているもので、今回は機器資材展示とともに、次のテーマで講演がなされた。

「国際化における施設園芸の現状と課題」農水省野菜振興課長・熊本誠氏

「ハウス施設の構造と雪害対策」千葉工業大学建築学科教授・羽倉弘人氏

「施設園芸における新害虫の発生と対策」スリップス類の生態と防除―野菜・茶葉試験場虫害研究室長・松井正春氏

「積雪寒冷地における施設有効活用のための野菜作付体系」元秋田県立農業短期大学教授・高井隆次氏

「施設園芸における新資材・新装置等による省力生産システム」栃木技術士事務所代表・板木利隆氏

「花きのセル成型苗の利用と育苗上の留意点」兵庫県立中央農業技術センター農業試験場園芸部長・池田幸弘氏

「寒冷地の気象条件を生かした切り花（球根）生産」静岡大学農学部教授・大川清氏

同協会によれば、園芸農産物の需要の伸び悩みから横ばい気味の施設園芸も、東北地域では農業構造の多角化を反映し、堅調な伸びを示しているという。兵藤会長は、「東北地方は積雪寒冷地であることから、施設園芸の展開の



施設園芸新技術研修会 秋田県で開催 9/18-19



があることから施設園芸が敬遠される傾向にある。そこで講演ではとくに雪害をはじめとする寒冷地対策について、様々な面からの提案がなされた。

まずハウスの雪害対策としては、施工法や被覆材の固定法を工夫したり、

害は、昭和59年には熊本県で被害が出るなど、寒冷地以外でも油断は禁物。被害経験がなくとも対策を知っておく必要はありそうだ。

また、積雪寒冷地で施設を有効活用するための野菜作付体系についての発表では、低温は技術的に解決できるものの、日照不足が最大の阻害要因としながらも、寒冷地の葉菜類の主流であるホウレンソウやネギ以外にも、ハクサイやダイコン、本来積雪寒冷地で栽培しやすいイチゴなどを、収穫期をズラし付加価値をつけながら生産することも考えられるとされていた。

さらに、低温性花き（Cool Crop）の導入や、寒冷地の気象条件を活かした切り花・球根の生産も、貯蔵養分への依存度が高く栽培期間が短い、密植が可能で高品質の導入によって、他地域との差別化を図った花きの周年生産化ができるのではとの見方も紹介された。

上では、ハウス構造のあり方、施設内導入品目の選択など難しい面もあるが、冷涼地としての条件を生かした有利な経営も可能」とし、多角経営の必要性を強調していた。

とくに寒冷地では、積雪による被害

次回は11月6・7日、大分県大分市での開催が予定されている。講演内容は、「野菜生産における国際化対応技術の現状と今後の課題」、「果菜類のリアルタイム栄養診断技術」、「青果物の流通の現状と課題」のほか、とくにイチゴをテーマとした、法人化による大規模経営事例、育種の現状と課題、病虫害の発生動向と防除対策など。施設園芸機器資材の展示会も併せて行われる。

お問合せは、園芸情報センター
☎03-3233-3634まで。